



三 物語工房へようこそ

「うーん。ここはどこだ？」

まぶたを通じて、ほんのりと明るい光が良太を目覚めさせた。床が冷たい。知らないうちに横たわっていたことに気づいた。空調の適度な温度の風が頬に当たる。体中の感覚が次第に目覚めていく。自分が自分に戻っていく。そんな感覚だ。

右手をついて、上体を起こす。左右に首を振って、部屋の中を見渡す。白い壁に向かって、白い机と椅子が並んでいる。ひい、ふう、みい、全部で七つ。そこに人が壁に向かっていて。必死で手を動かしている者、机に突っ伏している者、呆けたように、あらぬ方向に顔を向けている者、頭と首を振りながら船を漕いでいる者、様々だ。ただし、人は6人。主人公のいない机と椅子の一组がぼつねんと暇に身を任せていた。

「あの一」

良太は机に向かっていて人たちの背中に恐る恐る声を掛けた。だが、何の返事もない。よく見ると、みんな耳にヘッドホンを装着している。良太の声は聞こえないはずだ。だが、人は不思議なもので、池の中に小石を投げ入れたら波紋が起こるかのように、背中を見つめられているという気配を感じたのか、6人のうちの1人が椅子を回転させた。

「やあ。いらっしゃい」

男がヘッドホンをはずした。満面の笑みだ。まるで、良太がここに来ることを待っていたかのような笑顔だった。身なりは、眼鏡をかけ、髪の毛は七・三。白いボタndaウムのYシャツにグレーのズボン。ネクタイはしていない。胸元から褐色の肌が覗いている。良太と同様、サラリーマンのようだ。年の頃なら四十代か。現役のバリバリの働く戦士だ。そして、そのあいさつは、初めて会った人に対する言葉というよりも、同情や憐憫を含んだ、やや仲間意識の強い声だった。

良太は尋ねる。

「ここはどこですか？」

本来ならば、「はじめまして」のあいさつの言葉が適切だろうが、今、自分が置かれている状況を一刻も早く知りたいことから、相手を急かすような言葉が出たのだ。それぐらい、気持ちに余裕がなかった。

「ここかい。ここは物語工房だよ」

「物語工房？」

オウム返しの返事。言葉だけが耳から入り、脳を経由せずに、そのまま口から出て行った。良太にとっては、全くもって意味不明で、理解できない言葉だった。

「ああ、物語工房だよ。ここにいる6人が、今、小説を、物語を書いているんだ」

男の声がヘッドフォン越しに聞こえたのか、残り5人も椅子を回転させ、良太の方に体を向けた。

一番右端は女性。セーラー服を着ている。まだ、高校生のようだ。二番目の席は空席だ。三番目は三十歳そこそこの女性だ。キャリアウーマンか。紺の上着と紺のスカート。そして、中には白いシャツ。身なりはびしっと決まっている。四番目は最初に良太に声を掛けてきたサラリーマン風の男。五番目は剃髪の女性。出家でもしているのか。年齢は五十歳前後に見える。六番目は定年か、定年まじかの初老の男。髪の毛がないぶん、頭皮は艶々に光って見え、まだまだ元気で働けそうに見える。七番目は髪の毛全体が白髪の女性。陽だまりの中でお茶を飲んでいるようなおだやかな顔をしている。そして、全員が声を合わせ、少し疲労が溜まったかのような声を発した。

「ようこそ、IT出版社へ」

「IT出版社？」

再び、良太の耳から入った言葉がどこにも経由せずに、すぐに口から出た。

「そう。IT出版社だ。今日から、君は私たちの仲間だ。席は、今、空いている場所。パソコンも準備されているから、早速、小説を、物語を書いてくれよ」

四番目の男はなんだかほっとしたような顔だ。

「そうよ。二十代前半の男の子が読む物語なんて、あまり思い浮かばないの。その分野はこれから君に任すわ」

三番目の女性が、新入社員に向かって指導するように良太に話を掛けてくる。

「二十代前後？」

まだ、自分の置かれている状況がよくわかっていない良太。

「もう少し、詳しく話してあげたらどうですか。まだ、この状況が飲み込めていないように見えますけれど」

長い人生を経て、良いことも悪いことも全て飲み込んできた、白髪の気品溢れる女性がサラリーマンに促す。

「ああ。そうですね。まずは自己紹介からかな。私は、秋鼻旧二。もちろん、ペンネームだけどね。純文学担当だ」

「秋鼻旧二？ひょっとして、「こぼっちゃん」の作者ですか？」

良太は額に三本の皺を寄せて、鼻の頭にも二本の皺を寄せて、左斜め上を見つめながら、記憶を呼び起こそうとする。

「ああ。とりあえずね」

「とりあえず、ですか？」

「詳しい話は、後から説明するよ」

ペンネームにこだわりのない秋鼻さんが仲間の紹介を続ける。

「私から見ると一番右端の女性が、お菓子の大納言さん。メンバーの中で、最高年齢だ」

良太に詳しい話を説明するように提案してくれた女性だ。

「まあ、秋鼻さん。個人情報の漏えいはやめて欲しいですわ。とりあえず、お菓子の大納言です。古典担当です」

女性は座ったまま、ゆっくりと時代を遡る様に頭を下げた。

「古典担当ですか？「枕の掃除」の作者ですね」

時代を飛び越え、すぐに反応する良太。

「そうだ。君は記憶力がいいね。この仕事にピッタシだ。それなら、君が知っている人から順に説明するよ。私の左側の女性が、村下夏草さん」

「とりあえず、村下です。現代純文学を担当しています」

「「乗り遅れた森」の作家ですね。今週のベストセラーの3位でしょう。すごいですね」

「ここの書店だけのことですよ」

先ほど、良太に向かって、二十代前半の男子が読むような小説を書くように、と命令する口ぶりとは異なって、今度は謙遜する村下さん。

「さすが。自分でも小説を書いているだけあって、作品名と作者名がすぐに結びついているんだね。それなら、作品名で紹介するよ。「良馬が行く」の作者の五馬悪太郎さん」

秋鼻さんが紹介したのは、お菓子の大納言さんの左隣で、頭の長い友達を失った初老の男性だった。

「はじめまして。五馬です。歴史担当です」

「司馬ではないんですか」

「とんでもない。司馬遼太郎さんはとても尊敬しています。でも私なんて、文章にしろ、内容にしろ、生き方にしろ、とても、そこまでの境地には到達していません。少しでも、後塵を拝せたらと、五馬と名乗っています」

とても悪太郎と言う名前とは思えないほどの、にこやかな人だ。でも、司馬さんを尊敬するぐらいだから、現役時代は、バリバリの企業戦士だったんだろう。

「私の右隣が、日本海やかましさんだ。昔は、ベストセラー作家で、書く作品がいつも一番の売り上げを誇っていたんだ。今は、出家して、書く機会が減ったけれど、新作を出す度にベストセラーなんだ」

良太が最初に思ったとおり、女性は出家していた。

「日本海やかましです。ベストセラー作家だなんて、そんなことはないですよ。あたしは書きたいことを書いているだけですよ」

とても騒がしいとは思えない人が、頭を剃った頭を静かに下げた。彼女はきっと日本海の荒波のような人生を過ごしてきたのだろう。比喻だけど、時には、拉致されそうになったり、時には、ミサイルが頭の上を飛び越したかもしれない。苦労や悲しみを知っている人ほど発言に重みがある。何でも、自信がある人ほど、謙虚なのだろう。

「あたしも女性として尊敬しているの。結婚はしていたけど、好きな人ができたので、配偶者を捨てて、逃避行。その体験を基に、男性にとらわれない、自立した女性を題材に小説を書いているのよ。うらやましいわ」

村下夏草さんが良太の耳元で風にそよぐ草のようにそっと囁いた。

「最後に、「百万回死にそうだったのら猫」の作者の太平洋子さん」

良太が見る限りでは、メンバーの中で一番若そうに見える。多分、二十歳にはなっていないだろう。やはり、高校生か。

「太平洋子です。あたし、童話作家になりたいんです。いずれは、「いないいないぐー」や「頭のぐりぐり」、「顎がぐらぐら」とか、子どもたちだけでなく大人たちも楽しめる童話を書きたいんです」

彼女の目は、猫のように黒眼が大きくなったり、小さくなったりしている。そう言えば、ここの部屋も明るくなったり、暗くなったりしている。互いに影響しあっているのか。。

「これで、全員だ。さあ、君が好きな作家や小説は？」

普通、自己紹介ならば、名前が名乗るのが先だが、ここでは異なるらしい。名前を聞いても、その人の性格や思考、嗜好はわからない。名前なんて意味はなく、とりあえず、の程度のもの。それよりも、好きな作家や小説を聞けば、その人のなりがわかる、というのが、ここのリーダーである秋鼻さんの言い分だ。

「そうですねえ」

良太は、今度は、右斜め上方向に目を動かして考える。これまでも、本は手当たり次第に乱読し

てきたので、これと言った好きな作家はいない。あえて言えば、ファンタジーやS F、推理小説が好みだ。

「それはいい。ちょうど、その分野がいなかったんだ。これで、わが書店もほとんど全ての読者に対応できるよ。書店の発行人にも喜んでもらえるよ」

秋鼻さんの顔には、誕生日にケーキのろうそくの火を一気に吹き消したかのように、満面の笑みが浮かんだ。

「書店の発行人ですか？秋鼻さんじゃ、ないんですか？」

良太の驚きに、急いで顔の前で手を振る秋鼻。

「わたしは単に雇われ、使われ、いや、正式には、封じ込めと言ったほうがいいかな、ここにいる仲間と同様に、一作家に過ぎないよ」

その時だけ、秋鼻さんは、突然のゲリラ豪雨に遭遇したものの、傘がないために、身動きができないまま本屋の軒先で所在無さげに雨宿りをしているサラリーマンのような顔になった。

「封じ込め、ですか」

良太はその言葉の本当の意味を探るかのように秋鼻さんの顔をじっと見つめる。

「さあ、みなさん。休憩時間は終わりですよ。仕事に取り掛かってください」

部屋の隅のスピーカーから聞き覚えのある機械音がした。そう。本屋の受付の人型ロボットの声だ。先ほどまで、談笑していた秋鼻さんたちは「ポッパーだ」と顔色を変えると、椅子をさっと回転させ、十の指がこんがらがるようにキーボードを叩き始めた。

「あなたも席に着きなさい」

ポッパーと呼ばれたロボットの声だ。命令口調だ。この部屋の中が見えているのか。

「席って、どこ？」

良太はスピーカーに向かって尋ねた。

「その空いている席です」

「座って、何をするんだ」

「ここにいる皆さんと同じように、小説を書きなさい。あなたの好きな、ファンタジーやSF、推理小説です。あなたも作家になりたいんでしょう」

「ええ？小説？」

良太は秋鼻さんを始め、周りのみんなの様子を見る。彼らはここで小説を書いていたのか。そりゃそうだ。本屋の書棚に彼らの作品が並んでいたのを良太は思い出した。

「さあ、書きなさい」

普段から、小説もどきの文章は書いている良太だが、プロの小説家ではないので、さあ、書けと言われて書けるものではない。だが、ポツパーの声色があまりにも厳しかったので、空いている席に仕方なく座った。

右隣は女子高校生。左隣は先輩OLだ。その隣がサラリーマン。どこの組織でも序列があるらしい。どう見ても、年齢順に並んでいるように思える。彼ら、彼女らたちは、パソコンの画面を凝視したり、口をポカンと開けたまま天井を眺めたり、横に並んでいる同僚？たちの手の動きを見つめたりしている。そのうちに、チャイムが鳴り始めた。

「ああ。休憩だ」

第一声は秋鼻さんの声だ。それまで真剣にパソコンに向かって、良太から見れば、華麗なる指のダンスを舞っていた6人が、一斉に、椅子から立ち上がった。寝転ぶ者。お茶を飲む者。背伸びをする者。座って、瞑想に耽る者。ストレッチをする者。みんな様々だ。良太は目を瞑っている秋鼻さんに話し掛けた。

「皆さん、一体、何をしていますか。何のために、ここにいるんですか……」

疑問が疑問を呼ぶように、尋ねたいことが山ほどあった。

「そうだね。君は、いきなり、机に向かえと言われたんだね。もう少し、詳しい話をしようか」

秋鼻さんが言うのには、ここは物語工房で、ここにいる、良太も含めた7人が小説を書いて

いる。そして、完成した小説は上の本屋やインターネットで販売している。ここの本屋、物語工房の発行人兼編集長はITで、7人に小説を書くように指令を出している。

ここにいる者は、これまでも曲がりなりにも小説もどきを書いていた人で、この書店が主催する懸賞小説や、良太のように、メールでおびき寄せられた者を捕獲して、小説を書かせているらしい。小説の書き方は、五十分間書いては、十分間休憩するシステムだ。まるで市民プールの遊泳時間と休憩時間のようだ。

ITがこれまでの大量の情報を分析した結果、もっとも効率的に作品が書け、かつ面白い作品になるのがこのシステムらしい。残り時間が後五分になって、急にアイデアがひらめき、筆を進めるため、時間が過ぎても座っていると椅子に強力な電気が走るのだ。

だから、休憩のベルが鳴ると、秋鼻さんたちは、パブロフの犬のように、椅子から反射的に立ち上がる。作家たちにしてみれば、心を置き去りにして、中途半端な気持ちで席を離れるけれども、逆に達成感がないため、これからだったのに、次はこう続けるぞという気持ちが、引き続いて作品を書きたいという強い意志に代わるらしい。だから、休憩後はアウトバーンを走っているドイツの高級車のように筆が高速で進むらしい。これも、全て、ITが多数の作家たちの経験や意見などを情報収集して判断した成果だ。所謂、ビッグデータの活用の効果だ。

「そこまでしないといけないんですか。みんな、なぜ、ここから逃げ出さないんですか」

良太は素朴な質問を続ける。

「ああ。私も、ここから一度は立ち去ったことがあるけれど、小説を書くという行為は麻薬やアルコール中毒、卑近な例では、タバコやコーヒーなどと同じように、一旦、書きだすとやめられないんだ」

「でも、それなら、自宅で書けばいいんじゃないですか」

秋鼻が何を今さらというような顔で良太を見つめる。

「君も家で小説を書いているんだろう？」

「はあ、ちょっとだけ・・・」と語尾が小さくなると同時に、体まで小さくなったような気になる良太。

「それなら、私たちの気持ちがわかるだろう。家ではまず書きだしの一文字が出てこないし、数

行書いているうちに、机の側にある辞書やマンガなどの本が気になって、すぐに書くのを止めてしまう。

それが証拠に、プロの作家だって、自宅では小説を書かずに、お金を出してまで部屋を借りたり、喫茶店巡りをしたりして、書く場所を変えている人が多いだろう。人間は、ある程度強制されたり、追い込められたりしないと書けないものなんだ。君だって、いつでも書けると言って、途中で止まった、ほったらかしの小説もどきはたくさんあるだろう」

それは、良太にも大いに覚えがある。家では1時間も書けば、煮詰まってしまい、すぐに新聞を読んだり、読みかけの本を開いたり、インターネットにつないだり、スマホをいじったりする。

確かに、思いついたり、閃いたりすると、最初の4から5ページくらいは順調に筆が進むものの、途中から運動会の徒競走で転んだかのようにページが止まる。立ち上がることができない。いや、立ち上がることさえ拒否している自分がいる。おもちゃが欲しい、お菓子が欲しいと泣き叫んでいる駄々っ子のようなのだ。

こうした結果、事実上、お坊さんに御経を詠んでもらわずに、パソコンの記憶媒体の中にお蔵入りになった小説もどきは、数十もある。それだけネタが豊富なんだと、才能が豊かなんだと自己満足に浸るものの、実際は、書ききれない、完成できないことに対する、自分の才能のなさを痛感している。なんとか、懸賞小説に期日までに応募するという強制力を行使して、小説を書いているのが現状だ。

「だから、こうして戻って来ては小説を書いているんだ」

「でも、小説を書くメリットは何ですか。お金ですか」

「確かに、小説を書いて、本屋やインターネットで売れば、原稿料の収入が入るけれど、それだけじゃない。極端に言えば、いや、そんなものはどうだっていいんだ」

「じゃあ、何故なんですか」

「それは君が一番知っているだろう。カッコよく言えば、自己実現。存在感の証明。何かを残したいんだ。いや、残らなくてもいい。何かを形にしたいんだ。人によっては、走るという形で、歌うという形で、料理を作るという形で、絵を書くという形で、実現しているように、私たちは書くという形で実現したいんだ。息や心臓や手足が自然と動いているように」

秋鼻さんは大きく目を見開きながらも、実際は自分の心の内側を見ているようだった。

「そうですか。でも、失礼なのですが、ここの小説は、いずれも、有名なというか、人気のある小説によく似ているというか、パロディというか、良く言えば、本歌取りをしているように思えるんですけど……」

詰まりながら、少しいいにくそうに良太は秋鼻さんの喉ぼとけを見つめる。目を合わせられないからだ。しばらくの間、秋鼻さんは唇を噛んだまま黙っていたが、一息、唾を飲み込むと、

「実はそうなんだ。理由は」としゃべろうとしたところで、

「お仕事の時間です。お仕事の時間です。皆さん、今すぐ席についてください」